

# 名古屋城の石垣を知るために その1

名古屋城の石垣は、本丸・二之丸・西之丸・御深井丸を中心として築かれており、三之丸を含む城全体での総延長は約 8.2km です。高さは、天守台以外の部分が 5～13m、天守台東側が約 12.5m、西側と北側で約 20m です。総面積は、推定で 5 万㎡に及びます。

**名古屋城の石垣普請（石垣工事）** 名古屋城の石垣は、徳川家康の命令の下、西国を中心とした 20 大名による割普請（天下普請）によって築られました。石垣を含む普請（土木工事）は、慶長 15 年（1610）6 月 3 日より根石置きが始まり、8 月には加藤清正が天守台の石垣を完成させ、9 月には本丸・二之丸・西之丸・御深井丸の石垣がおおよそ完成したと伝えられます。

**石垣の調べ方** 名古屋城の石垣は、築城以来幾度かの地震、戦災、そして長い年月の経過による石垣の劣化や修理などに伴う積み替えなどの変遷が所々見受けられます。そこで、城内の石垣を末永く保存していくため、石垣の「健康状態」を的確に診断することが、石垣の調査・研究を行うためにも重要です。全国各地の石垣を持つ城郭でも同様の試みが行われており、その調査を人間の「健康診断」に例え、その結果は一般的に「石垣カルテ」と呼ばれています。名古屋城でも、石垣の積み方をはじめ、石材種類・刻印・墨書・矢穴の有無などの基本情報を確認することからはじめています。

**名古屋城の石垣につかわれた石材** 名古屋城の立地する名古屋台地周辺では、石垣の材料になる岩盤・岩脈がありません。近くても直線距離で 15km の小牧市岩崎山、多くは直線距離で半径 50km 前後の石材産地から、運ばれてきています。名古屋城築城期における石材は、小牧市岩崎山・瀬戸市方面の花崗岩、篠島をはじめ三河湾沿岸で産出する花崗閃緑岩、岐阜県揖斐川沿岸の多度山系などの砂岩が中心とされています。いずれの石も同様に硬いため、堅牢な石垣を築くことが可能になりました。また、姫路の池田家や和歌山の浅野家のように、遠く離れた自領からはるばる石材を運び、石垣の一部に積み上げた大名もいます。

**「刻印」・「墨書」と「矢穴」** 石垣に使われている石には様々な印が刻まれています。これらの印は、刻印または刻紋と呼ばれ、石垣を築くことを命じられた諸大名の職人が、自分たちが使う石を他大名の石と区別するために刻んだ合印の意味があったと考えられています。また、石を割る際に刻まれた矢穴も多く残されています。

（学芸員 木村有作）

